

看護福祉学部

学校推薦型選抜(一般) 小論文

問題 次の文章は、連載コラム「街で障害のある人と出会ったら～共生社会のマナー」の最終回の記事（ヨミドクター2021年9月22日・富樫正義氏執筆）から抜粋したものです。この文章を読んで問いに答えなさい。

障害ってどこにあるの？ 「個人」か「社会」か…パラリンピック閉幕に思う「本当の共生社会」

ヨミドクターをご覧のみなさま、サービス介助士インストラクターの富樫正義です。コロナ禍に開かれた東京パラリンピックが無事閉幕しました。パラリンピックのスローガンとして「多様性と調和」が掲げられ、閉幕に伴い「これからは社会を変えることが大切である」という声を多く聞きましたが、社会を変えるとはどのようなことでしょうか。今回は障害の捉え方から、誰もが生活しやすい未来に向けて、社会をどのように変えるべきなのかを考えていきましょう。

あらためて障害について考えてみると、障害には二つの捉え方があります。一つは、例えば、「その人が聞こえない、歩けないということは、本人の問題であって、個人の責任である」とする考えです。この考えを「障害の個人（医学）モデル」と言います。個人の問題ですから、日常生活で生じた困ったことを解決するためには、「その人の努力や工夫」が求められます。パラリンピックの中継で、アナウンサーが「障害を乗り越えて」というフレーズを使用していましたが、これは障害の個人モデルの視点と言えます。スポーツ競技であれば、個人の努力で記録を伸ばしたり、勝負に勝ったりするのは素晴らしいことであり、障害の有無にかかわらず、称賛されることです。

そして、もう一つの考え方が、障害は社会側にあるという考えです。障害のある人が社会において直面する困難さ、例えば、聴覚障害者が電車内のアナウンス情報が得られないのは、音声情報しかないからであり、肢体不自由者がエレベーターのない施設を利用しにくいのは、施設に階段しかないからであるという、「社会の作り」に問題があるという考えです。

音声情報が聞こえる人、階段で移動が可能な人など、多数派にとって便利な社会が作られていることで、少数派にとっては不便になっている現実があり、社会の作りや仕組みの偏りが障害の要因となっているという考え方を「障害の社会モデル」と言います。障害の社会モデルの視点で考えると、改善すべきは社会環境であると言えます。

現存する社会の障壁（バリア）には、事物（段差などの物理的なもの）・制度（入試や入会などでの制約）・慣行（音声情報や視覚情報が主となっていくような文化・情報）・観念（人の心にある差別や偏見など）という四つのバリアが挙げられます。今、社会を変える必要性が問われているのは、背景にこの「障害の社会モデル」の考えがあるからです。

多様な人々が暮らす社会で、「使う人は多数派だけでない」という想像力を持って、社会

作りをすることが求められています。一人ひとりが、普段は意識することがあまりない社会の「あたりまえ」(多数派の利便性)が、少数派の「障害」(社会的障壁)を生みだしているかもしれないという意識を持つことが、社会を変える第一歩と言えます。

本コラムは、「街で障害のある人と出会ったら」をテーマに、街中でのお手伝い方法をお伝えしてきました。しかし本来なら、「お手伝いが必要のない社会」を目指していくことこそが共生社会につながります。ただ、街中の段差や法律など、すぐに変えることが難しい問題もあります。

私がインストラクターを務めるサービス介助士という資格は、多様な人の困りごとに気づいて行動することを目指しています。このコラムで取り上げたエピソードは、サービス介助士として活動する中で得た体験です。

問1 筆者の言う「お手伝いの必要のない社会」とはどのような社会を意味するのか、50字以内で述べなさい。

問2 あなたが考える理想の共生社会とはどのような社会ですか。その理想の共生社会の実現を妨げている要因は何ですか、またその障壁を取り除くためには何が必要となりますか。500字以内で述べなさい。